宮に初めて参りたるころ　解答

A　語句の意味と読み

(1) どうしようもない。(どうにもならないほど) つらい。 ／「理（ことわり）無し」から。理屈ではどうにもならないほど困っている

(2) はっきりしている。あらわだ。目立つ。 ／高坏の上の灯火に照らされて、昼よりもかえってはっきり見えてしまう

(3) がまんする。じっとこらえる。 ／★「祈る」の意味もあるが、ここは恥ずかしさをこらえて絵を見ている

(4) (色が) つややかに美しく映える。 ／★目に見える美しさ。「香りがする」と訳すと誤り

(5) じっと見つめる。 ／「目（ま）守る」から。現代語の「守る」ではない

(6) いけない。だめ。(禁止を表す語) ／★「真名（＝漢字）」とまちがえない

B　文法

(7) 「ぬ」＝強意（確述）の助動詞「ぬ」の終止形。「べけれ」＝推量の助動詞「べし」の已然形。「ぬべし」で「きっと～しそうだ・～してしまいそうだ」の意。 ／「べし」などの推量の語の上の「ぬ」は、完了ではなく強意と考える。已然形＋「ば」は順接確定条件（～ので）

(8) 「させ」＝尊敬の助動詞「さす」の連用形。尊敬の補助動詞「たまふ」と重ねた形を二重敬語（最高敬語）という。 ／下に「たまふ」があり、動作の主が中宮なので、「させ」は使役ではなく尊敬

(9) 「え～まじ」＝不可能の推量（～できそうにない）。「まじう」＝打消推量の助動詞「まじ」の連用形「まじく」のウ音便。 ／副詞「え」は下の打消の語と組み合わさって不可能を表す

(10) 結び＝「けれ」、活用形＝已然形。「けれ」＝過去の助動詞「けり」で、ここは詠嘆（初めて気づいた感動）の意味（～だったのだなあ）。 ／こそ→已然形。初めて中宮の美しさに気づいた感動を「けり」で表している

(11) 自発の助動詞「る」の連体形。(自然と～してしまう) ／心の動きや気づきの動詞に付く「る」は自発が多い。下の副助詞「まで」に続くので連体形

(12) 強意（完了）の助動詞「ぬ」の未然形「な」＋意志の助動詞「む」の終止形。(早く下がってしまおう) ／★「なむ」の識別：「下る（おる）」は上二段活用で、未然形も連用形も「下り」なので、形だけでは決まらない。ここは作者が自分で「早く下がろう」と思っているので「な（強意）＋む（意志）」。他への願望の終助詞「なむ」（～してほしい）では意味が通らない

C　主語・指す内容・敬意の方向

(13) 謙譲語（「あり・をり」の謙譲語で「お控え申し上げる・お仕えする」）。作者（清少納言）から中宮定子への敬意。 ／地の文の敬語は作者からの敬意。謙譲語は、お仕えする相手（中宮）を高める

(14) 動作の主＝中宮定子。作者（清少納言）から中宮定子への敬意（二重敬語で、最も高い敬意）。 ／二重敬語は、地の文では中宮のような最も身分の高い人に使われる

(15) 謙譲語（謙譲の補助動詞「参らす」＝～申し上げる）。作者（清少納言）から、見つめられる相手である中宮定子への敬意。 ／じっと見つめているのは作者、見つめられているのは中宮

(16) 中宮定子が、早く下がろうとしている作者（清少納言）に向かって言った言葉。 ／受けの「仰せらるる」は「仰す」＋尊敬「らる」の二重敬語。中宮の言葉であることがわかる

(17) 作者（清少納言）が、中宮定子に（顔を）見られること。 ／「御覧ず」は見る人（中宮）を高める尊敬語。そこに受身の「らる」が付いて「中宮にご覧になられる＝中宮に見られる」

D　口語訳

(18) (中宮様が) 絵などを取り出してお見せくださるのを、(恥ずかしくて) 手さえも差し出すことができそうになく、どうしようもない。 ／「え～まじう」＝～できそうになく。「手にても」＝手さえも

(19) このような（すばらしい）方がこの世にいらっしゃったのだなあと、はっと目がさめるような思いがするほど、(中宮様を) じっと見つめ申し上げる。 ／「おはします」は「あり」の尊敬語。「まもり参らする」が連体形なのは前の「ぞ」の結びだから

(20) 夜明け前には、早く（自分の部屋に）下がってしまおうと、自然と気がせく。 ／「とく」＝早く。「いそがるる」の「るる」も自発

(21) どうして斜めからでも（顔を中宮様に）ご覧いただけようか（、いや、とても見られたくない）と思って、やはり伏せたままでいるので。 ／「いかでかは～む」は反語。訳に「いや、～ない」の打ち返しを入れる

宮に初めて参りたるころ　解答／現代語訳

E　内容・記述

(22) 宮仕えを始めたばかりで、何かにつけて恥ずかしいことが数えきれず、涙もこぼれそうなほどだったので、顔や姿がはっきり見られにくい夜を選んで参上していたから。 ／あとの「葛城の神」のたとえも、夜しか姿を見せない作者をからかったもの

(23) 高坏の上に灯火をともしてあって明るく照らされていたので、髪の筋などまで昼よりもくっきり見えたから。作者は、まぶしいほど気恥ずかしかったが、がまんして絵を見ていた。 ／「まばゆけれど、念じて見などす」までを手がかりにする

(24) 葛城の神は、顔が醜いのを恥じて夜しか働かなかったという神である。夜明け前に急いで下がろうとする作者を、夜だけ姿を見せるその神にたとえて軽くからかいながら、もう少しここにいなさいと、やさしく引き止めようとする気持ち。 ／★「からかい」だけでも「引き止め」だけでも不十分。中宮の機知とやさしさの両方を書く

(25) 格子を開けると外が明るくなり、顔を見られるのを恥ずかしがっている作者の姿があらわになってしまうので、作者を気づかって、女房が格子を開けるのを止めたから。 ／⑭で作者は伏せたまま顔を上げられずにいる。その様子を中宮は見ていた

F　文学史（本文全体をふまえて答える）

(26) 作者＝清少納言。成立＝平安時代中期。ジャンル＝随筆。 ／『方丈記』（鴨長明）・『徒然草』（兼好法師）とあわせて日本三大随筆という

(27) 中宮定子。一条天皇の中宮（后）で、関白藤原道隆の娘。作者の清少納言は、この定子に女房として仕えた。 ／作者が定子のもとに出仕したのは、正暦四年（九九三年）の冬ごろとされる

(28) 類聚的章段（ものづくしの章段）・日記的章段（回想的章段）・随想的章段の三つ。この文章は、宮仕えのころの体験を思い出して書いた日記的章段（回想的章段）にあたる。 ／「うつくしきもの」などの「〜もの」の章段は類聚的章段、「春はあけぼの」は随想的章段

【現代語訳（全文）】

中宮様の御所に初めて出仕したころ、何かにつけて気おくれすることが数えきれないほどで、涙もこぼれてしまいそうなので、夜ごとに参上して、三尺の御几帳の後ろにお控え申し上げていると、（中宮様が）絵などを取り出してお見せくださるのを、（恥ずかしくて）手さえも差し出すことができそうになく、どうしようもない。（中宮様は）「この絵は、ああで、こうで。それか、あれか。」などとおっしゃる。高坏の上にお灯し申し上げてある灯火なので、髪の筋なども、かえって昼よりもはっきり見えて、まぶしいほど気恥ずかしいけれど、がまんして（絵を）見たりする。とても寒いころなので、（中宮様が）差し出していらっしゃる御手がわずかに見えるのが、たいそうつややかに美しい薄紅梅色であるのは、この上なくすばらしいと、（宮仕えに慣れない）里の者の気持ちでは、このような方がこの世にいらっしゃったのだなあと、はっと目がさめるような思いがするほど、じっと見つめ申し上げる。

夜明け前には、早く（自分の部屋に）下がってしまおうと、自然と気がせく。（中宮様が）「葛城の神も、もう少し（ここにいなさい）。」などとおっしゃるのを、どうして斜めからでも（顔を中宮様に）ご覧いただけようか（、いや、とても見られたくない）と思って、やはり伏せたままでいるので、御格子もお上げしない。女官たちが参上して、「これ（＝格子）を、お開けください。」などと言うのを聞いて、女房が開けようとするのを、（中宮様が）「いけません。」とおっしゃるので、（女官たちは）笑って帰っていった。

▸ 古文・漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/koten-kyozai-review/　　▸ 解説記事にもどる